◉クローバーゼミ開設記念

多角的な視点を持ち、自ら学びを深める新スタイルのゼミ

クローバーゼミ

アクティブ・ラーニングの手法を用いた参加型授業

■<人文科学担当>：文学部 総合文化学科
高橋 雅人（まさひと） 教授
■<社会科学担当>：人間科学部 心理・行動科学科
小林 知博（ともひろ） 教授
■<自然科学担当>：人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
高岡 素子 教授

神戸女学院大学では、2017年度からの新カリキュラム導入に伴い、1年生後期に（音楽学科は2年生後期）「クローバーゼミ」を開講する。1年生必修であるこのゼミは、人文科学、社会科学、自然科学の3領域の教員がチームとなって授業を進め、学部学科を横断して集まった学生と共同で学びを深めていくというもの。開講に先駆け、2016年度は「鯨」をテーマに計14回のトライアルゼミを実施。対象は1年生後期の希望者で、定員を上回る36人の応募があった。この初となる試みに、先陣を切ってチームを組み、指導にあたった高橋先生、小林先生、高岡先生に話を聞いた。

―クローバーゼミ開設の背景をお聞かせください

高橋先生　日本の18歳人口は2018年頃から急激に減少し、大学への進学者数にも大きな影響を与えると予想されています。その対策として本学は、2014年に「2018年問題検討ワーキンググループ」を設立し、時代に即したカリキュラムの構築を検討してきました。そして、本学の魅力であるリベラルアーツ教育をより体系化し、学生の主体的な学びを喚起しようと、このゼミを発案しました。

小林先生　新ゼミでは人文・社会・自然の3領域の教員と3学科の学生が集まって、様々な視点に気づく授業を展開します。私達は学生に、幅広い知識と、異なる意見を受け入れられる柔軟性、他者とコミュニケーションできる対話力、どんなメンバーとでもやっていける適応力…といった「人間力」を備えて欲しいと願っており、そうした力を養う内容です。

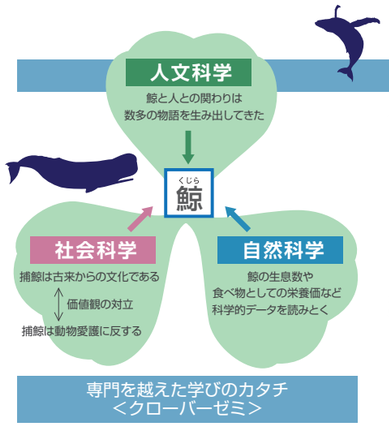
高岡先生　全学科必修のゼミであり、教員にとっても初の経験となるため、私達3人でトライアルゼミを実施することにしました。授業は各教員が4回ずつ担当。3人の教員はともに全授業にも立ち会って、情報共有しながら進めました。

―「鯨」をテーマに、どのような内容を展開されたのですか？

小林　まず、社会科学の分野からは学びの目標を、集団による物の考え方の違いを知ること、人前でどちらの立場からも論理的に話ができるようになることの2つとしました。西洋の見解として海外の動物愛護団体から抗議運動を受けた和歌山県太地町の捕鯨に関する映画を、日本の見解として漁師の視点で捕鯨を扱ったNHKスペシャル番組を観賞。新聞・雑誌記事も参照の上、賛成と反対のグループに分けてディベートを行いました。

高岡　次に、自然科学からのアプローチということで、生物としての鯨を扱いました。「鯨はどうやってコミュニケーションを取っているのか？」など、自由に問いを立ててもらい、それらを全て付箋に書いて貼り付け、カテゴリ分けして、ディスカッション。グループディスカッションでは話せない学生も、この方法なら必ず話す機会があるため、参加意識が高まるのです。その後、班で優先順位の高かったテーマについて、各自で調べてレポートを作成。鯨に関する実験を計画し、プレゼンテーションを行いました。

▲写真：左から高岡教授、高橋教授、小林教授



専門を越えた学びのカタチ
<クローバーゼミ>

高橋　最後に、人文科学の分野から。まず、3種の百科事典から鯨に関する記事を拾い、読み比べを行いました。例えば、ブリタニカは生物としての内容が多く、日本の事典は文化に関する記述が多い。そこに気づいた上で、さらに様々な立場からの視点を養うために、世界各地の捕鯨や捕鯨文化の歴史と現状を学際的に検討した論文集より数編を読んで、グループディスカッション。自分は鯨のどこに興味があるのかに気づき、それを図書館で調べ、レポートを作成してもらいました。

―手応えはいかがでしたか？

高橋　学生への事前アンケートでは、人前で話せるようになりたい、ディスカッションやプレゼンができるようになりたい…と、自分に不足しているところを伸ばし学びたいという意欲が感じられました。事後アンケートを見ると、それらに対する達成感は高かったようです。

小林　全14回の授業を通して、プレゼン、ディベート、レポートの3種類を経験できたのがよかったようですね。同じ題材でも学問分野によってアプローチが違い、同じ学生同士でも考え方が違う。様々な視点に気づくと同時に、調べる力もついたと思います。

高岡　これまで、学生は与えられて勉強してきています。そのため、正解や正解への道筋を教えて欲しいと求めてくる傾向があると感じました。でも、クローバーゼミではなるべく教員は介入しません。大学は自分が面白いと思うことを自主的に学ぶ場所。それが学修だと気づいて欲しいですね。

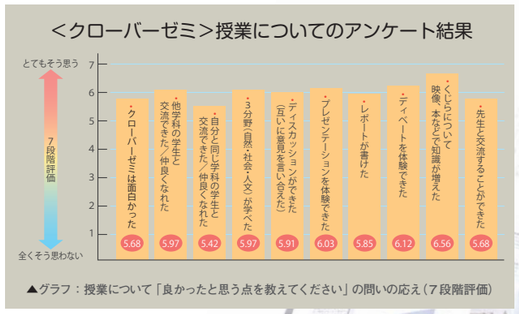
―トライアルを生かしての2017年度。教員側には何が求められるでしょう？

高橋　2017年度は、9つのチームがそれぞれ異なるテーマを設定します。ゼミの中で、学生の自主的な学びをいかにうまく引き出すか。引き出す授業は、学生がどのように伸びていくのか読めないので大変です。しかし、教員は学生のポテンシャルをこんなものだと決めつけず、もっと信じてよいと思います。

高岡　これまで自然科学の分野は座学が多く、実験も手順が決まっているものを与えることが殆どでした。これからは与えるのではなく、学生の興味や自主性を引き出すことが教員の役割。学生と教員の意識改革が必要ですね。

小林　学生達は社会に出たら様々な判断を求められ、正解は必ずしも1つではありません。その中で大学はどういう教育をすべきか。知識を入れるだけならインターネット授業でもよいでしょうが、同世代の学生が集まって意見を言い合ったり、切磋琢磨してプロジェクトを完成させたりするなど、相互作用によって多様な状況への適応力が身につく。大学で学ぶ最大の魅力はそこにあると思うので、教員側もそれを意識した授業作りが必要になると思います。

高橋　また、このゼミは教員同士のコミュニケーションがとても大切です。チームでどのように情報共有をするのか考えていかねばならず、他の教員がどんな授業をしているのかを知ることも必要です。教員にとっても勉強になり、多くの気づきを得られると思います。



▲グラフ：授業について「良かったと思う点を教えてください」の問いの答え（7段階評価）

―学生へのメッセージをお願いします

小林　学生にはこのゼミを受けることで、他領域を学ぶ楽しさ、他者との意見の違いとそれを共有し、自ら判断する楽しさに気づいて、より充実した大学生活を送って欲しいですね。そこで培った力は、卒業後も社会で生き抜くために役立つ「一生の道具」です。本学での学びをきっかけに、道具の数を増やしながら、よりよい人生を送って欲しいと願っています。